

日経短評によせて（その1）

—現代会計を鍛錬する—

2014年9月14日

本日9月14日の日経新聞の書評欄に、この8月に刊行された拙著『揺れる現代会計』（日本評論社）の短評がでていたようです。うっかり見落としていましたが、ある先生がご丁寧にも知らせてくれました。

さっと読んでみましたが、「相対化」の意義を短評ながらしっかりとらえています。そういう印象をまず受けました。

「IFRSの存在感が高まる今だからこそ、本書のメッセージも価値を持つ」、なるほどそういう見方もあるな、日経の記者ならではですが—。

私のIFRS相対化の視点を、日経記者のスタンス（IFRS推進派？）からは、そうとらえるということでしょうか。

「対象を相対化し多角的に批判を加えることが、現代会計を鍛錬することにつながる」、ここもそうです。「鍛錬」、なるほど言い得て妙です。

ともかくも、短評は執筆者の筆の力がよくあらわれます。厳しい字数制約はその意味で、論文執筆とは違って文章力が鍛えられます。

一般に大学の教員はそういう訓練・作業をつんでいないので、つまりどう書くかに神経を削ることなく、学者（教授）という名のもと自由勝手、気ままに書けばよいので、「これはすごい！」とつい唸るような文章力を見せつけられることはめったにありません。

まさに文章を鍛錬するという意識と作業が希薄なのです（※補遺1参照）。

日経短評によせて（その2）

—日経のスタンスは—

2014年9月15日

私のIFRS相対化の視点を、日経記者のスタンス（IFRS推進派？）からは、「IFRSの存在感が高まる今だからこそ、本書のメッセージも価値を持つ」ととらえる。

そこが日経記者らしく、なかなかうまいな（我田引水？）と思います。

ついでですが、9月12日の「大機小機」を読みました。内容から日経外部の人のコラム

でしょうが、そこではのれんの非償却につき「見かけ上の決算をかき上げしている例が少なくないのに、こうした問題は誰も指摘しない」と記しています。

その通りですが、そして指摘されているはずですが、より大きな問題はそれが株価（企業価値）につながるというある種の企業や投資家の共同主観性（間主観性、物神性）に根ざしているように思っています。

より実在的・存在的な思想に根ざしたとき、その幻想（イリュージョン）の正体も明らかになるのではと思います。

ちなみに、共同主観性が幻想に基づいているとき、それは「共同幻想」にほかなりません（※注1）。

私の我田引水になりますが、拙著『揺れる現代会計』123 ページで証券市場機構の「架空性」の議論－市場の時価総額と個別企業の評価益－をしたのも、そのことにかかわります。

ともかくも、短評で拙著を取り上げてもらえたのは有り難いのですが、そしてその筆の力には感心しますが、そこに垣間見える日経のスタンスはみのがしていけないように思います。

※注

注1) 学生時代に（『言語にとって美とはなにか』とともに）読んだ吉本隆明『共同幻想論』では、国家・法・宗教の位置を示していますが、それらが独自の「幻想」であることを説いています（※補遺）。

単に経済的土台（下部構造）に規定される幻想（上部構造）とはみないわけです。この点はマックス・ウェーバーにも通じて興味深いところです。

補遺：吉本隆明『共同幻想論』の文庫版によせて

補遺1：理解と表現－理解のふかさと表現の易しさ・豊かさ

ちなみに、吉本作品の最初の文庫版（角川ソフィア文庫）が『共同幻想論』ですが、あらため文庫版も取り寄せ読んでいます。その「角川文庫版のための序文」（1981年10月25日）に次のような文章があります。私が日頃から思っていることですので、2つ引用します。

①「著者の理解がふかければふかいほど、わかりやすい表現でどんな高度な内容も語れるはずである」

②「著者には、この内容に固執するかぎり、どうやってもこれ以上易しいいまわしは無理だという諦めと、この内容をもっと易しいいまわしであらわせないのは、じぶんの理解にあいまいな箇所があるからだという内省と一緒にやってくる。この矛盾した気持ちのまま、いまこの本を読者のまえにさらしている」(下線強調は石川)

世間で教授と言われる人にあってはこれとはまさに逆、さほど内容のないものを難しく語る、というのが一般ではないでしょうか。

補遺2：国家という幻想－国家イメージの相違、西洋とアジアの

もう1つ重要な点があります。吉本は「ある時期この国家のイメージのちがいに気づいたとき、わたしは蒼ざめるほど衝撃を受けたのを覚えている」と述べています。西洋の国家概念つまり、吉本のタームで共同幻想ということですが、この西洋とアジアの国家イメージの相違は重要に思えます。

会計基準統合の問題も国家間の関係が大きくからむだけに、そのこともかかわってくるはずですが。概念フレームワークのあり方(制度性)も、それともからむ1つの事例です。そういう視点で分析すると、何かが見えてきます。

補遺3：子供の異空間と大人の論理－「平地人を戦慄せしめよ」

次の引用の「精神の慣性」という点は、いたく関心をいさぐ表現です。

「…国家は共同の幻想である。風俗や宗教や法もかた共同の幻想である。もっと名づけようもない形で、週刊や民俗や、土俗的信仰がからんで長い年月につくりあげた精神の慣性も、共同の幻想である」(傍点は石川)

『共同幻想論』は禁制論から起源論まで11個ありますが、規範論から読まれるといいでしょう。

文庫版の序の最後は、また大変うまく書かれているところです。まことに含蓄のある表現です。

「…その意味で、この本は子供たちが感受する異空間の世界についての大人の論理の書であるかもしれない」(傍点は石川)。

この点は、吉本が高く評価している柳田国男『遠野物語』での「平地人を戦慄せしめよ」という言葉に込められたメッセージに通じます。少なくとも私にはそう思えます。

短評

揺れる現代会計

石川 純治著

IFRS（国際会計基準）に代表される現代会計を歴史的にとらえ直し相対化する。これが本書の基本的な考え方だ。グローバルスタンダードは完成された所与のものではなく、使い手の企業や専門家が作り上げていくものである。対象を相対化し多角的に批判を加えることが、現代会計を鍛錬することにつながる。IFRSの存在感が高まる今だからこそ、本書のメッセージも価値を持つ。（日本評論社・1800円）

夢想と身体の人間博物誌

張 競著

近代以前の中国で、人々は自ら

の身体をどう見つめていたのか。夢と現実の関係をどう捉えていたのか。中国出身の比較文学者が文学や絵画、演劇など中国文化を広く探索し、日本との対比の中で立体的に描き出す。春画ひとつとっても、詩文の添え物とされた中国と、リアルで娯楽の要素が強い日本の違いは大きい。豆腐を歌い上げた詩の鑑賞など、食物を巡る一節が著者自身の豊かな詩想を表している。（青土社・2400円）

フランス人の不思議な頭の中

山口 昌子著

20年余り新聞社のパリ支局長を務めた著者が、国民の気質や移民の実態など幅広い視点から「フランス」を読み解く。軍歌である国歌などを引き合いに、オシャレなイメージを打ち砕く「好戦性」があると指摘。硬直したエリート主

義社会で人種差別も根深く、極右も台頭しているとすれば暗然とした気分になるが、帰国しない外国人は多いという。複雑怪奇な「自由・平等・博愛」の魅力が伝わる。（KADOKAWA・1600円）

無人島セレクション

無人島セレクション編集部編

「無人島に持っていくとしたら？」という問いに、浅井慎平、片岡義男、しりあがり寿らが、1枚のレコード、1本の映画、1冊の本を挙げ、思いをつづる。作品選びの意外性や選者の性格までうかがえ、奥が深い。音楽家の細野晴臣が祖母からもらった戦前の辞書は「今の辞書には載っていない言葉がいっぱい書かれて」いるという。付箋だらけのぼろぼろの辞書が味わい深く、思わず手に取りたくなる。（光文社・2000円）